



ひゅーまんらいつ

第46号 平成16(2004)年8月

心ゆたかな生き方のために

誰かの人権が侵害される社会から、
みんなが幸せを感じ、「心ゆたかな生き方」ができる社会にするために、
私たちにできることを考えてみましょう。

● 「差別する人」の問題

「・・・差別をされてきたことが人間として恥ずかしいことなのではない。また、貧しいことが人間として恥ずかしいことなのではない。人を差別してきた歴史こそ恥ずかしいのである。」

(福岡県部落史研究者 松崎武俊さん)

今、学校では、部落の子ども、在日の子ども、障害がある子ども、いじめられている子ども、心の病がある子どもなどの多くが、いつ人権侵害を受けるかわからない不安な日々を送っています。もちろん、同じ立場にある大人たちも、同様に不安な状況におかれています。

“差別”があるのは、ともすれば差別される側に「問題」があるようにいわれることがあります。しかし、どのような「問題」をとりあげようと、差別される側に責任はありません。

例えば、外国人の言葉づかいや服装などの違いを理由として排除したり、動作が緩慢という理由でいじめたりするのは、個性や多様性を認めず自分の価値観だけで人を判断している「偏見」に基づいた行為以外の何ものでもありません。

つまり、「差別する人」の意識に問題があるといえるのではないのでしょうか。



● なぜ、人は差別するのか

被差別・加差別の関係は固定的ではなく、差別意識は誰もが、いつでも、どこでも抱く可能性があります。

そこで次の対比関係を考えてみましょう。

例1 なぜ、部落は差別されるのか

→なぜ、部落を差別するのか。

例2 なぜ、障害がある人は差別されるのか

∴ →なぜ、障害がある人を差別するのか

「される」の考え方は、差別される側の問題として捉えるもので従来からある考えですが、差別事象を解決するためには、「する」側の考え方を追求することが重要といえます。

そして、この「差別される」「差別する」の人間関係は、およそ次の3点にまとめることができます。

- 差別する人には、「利益」、「不満の解消」などを、もたらす効果が期待できる。
- 差別する人には、誰かを排除することで自分たちの「優劣感情（自己満足）」を高める効果が期待できる。
- 差別される人には、格別大きな「不安」、「不利益」、「不快」などをもたらす効果が期待できる。

自分をふりかえってみませんか？

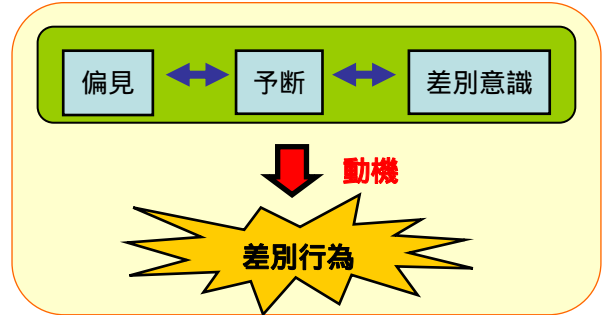
私たちが、何気なく使っている「偏見」とか「差別」について、もう一度よく考えてみましょう。

なぜ、差別行為が生じるか

「偏見」とは、十分な証拠もないまま、他人を悪感情で判断してしまうことです。これにより差別意識が定着し、何らかの「動機」により具体的な差別行為が発現することになります。[図1]は、その心理をモデル化したものです。

私たちは誰でも、偏見との相互作用により差別意識をもつことがあります。しかし、差別行為を発現させないためには、どうしたらよいのでしょうか。

[図1] 差別の核心モデル

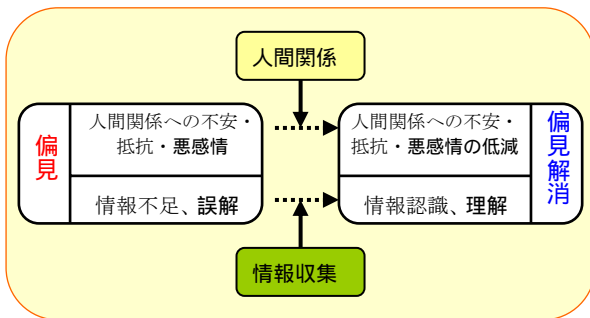


差別行為を発現させないためには、「偏見の解消」がその早道のひとつです。[図2]はその過程をモデル化したものです。

よりよい人間関係づくりと正しい情報の収集によって、相手への誤解を解き、悪感情を取り除くことができます。これにより、「差別行為」をおこさないことができるのではないのでしょうか。

心ゆたかで幸せに生きる方法は、私たち自身のちょっとした「気づき」や「努力」によって、ひらけていくものだと思います。

[図2] 偏見の解消モデル



参考文献

- 「人権学習を創る」 中川喜代子著（今月の本棚参照）
- 「ステレオタイプの社会心理学」 上瀬由美子著 サイエンス社
- 「差別とは何か？」 鳥取県部落解放研究所
- 「第3回部落解放の集い記録集」 鳥取県部落解放研究所



「人権学習を創る」 ～偏見と差別の社会心理学～

中川 喜代子 著
(1989 明石書店 ¥3090)

著者の中川さんは、人権学習・啓発を社会心理学から捉える第一人者として、現在でもあらゆる場面で活躍しておられます。

本書は、「差別」を許さず、魅力的な人権文化をつくりだそうとするあなたの必読書となるでしょう。

「人権学習」の第一条件は、まず私たち一人ひとりが、シャープな“人権感覚”を身につけることであると考えています。なぜならば・・・」(本文中より)

